

# 129

2020 SUMMER

## 美術館NEWS



「美術館の紹介」Vol. 29

美術館の正面玄関すぐ右手に見える  
金属製のオブジェは、石造りの壁面に囲まれている。  
大きく立体的なヴォリュームが特徴的で、  
隣り合う柔らかな石の質感と比べても  
異質さが際立つものの、不思議と周囲になじんでいるようだ。

# 令和おとぎ草子 桃太郎 KAMISHI by 松井えり菜

古川 文子(学芸員)

岡山県立美術館では現在、「令和おとぎ草子 桃太郎 KAMISHI by 松井えり菜」を7月12日まで会期を延長し開催しています。倉敷市出身の現代美術家・松井えり菜(1984-、第3回岡山県新進美術家育成「I氏賞」大賞受賞者)が「桃太郎」の物語を題材に制作した紙芝居形式の絵画と、邦楽の若手囃子演奏家が流派を超えて結成した「若獅子会」の語りと演奏のコラボレーションによる映像作品を中心に、その原画と油彩画、立体作品など合わせて16件による特別展示です。会場では先ず、桃太郎とおそろいの鉢巻を額に掲げた巨大なウーパールーパーが来場者を迎えます。幼い頃、友だちから似ていると言われた小さな生き物を、作者は自らの分身のように愛し、自画像と並ぶ重要なモチーフへと育ててきました。直径40センチほどの球形の発砲スチロールに下地を施し油絵具で彩色した作品の3Dスキャンデータをもとに、おっとり微笑むような桃色の顔貌が高さ3メートルにも及ぶ布製バルーンの表面に再現されています。その姿を川面を波立てて流れる桃になぞらえ、新たなおとぎ草子の世界がダイナミックに展開します。

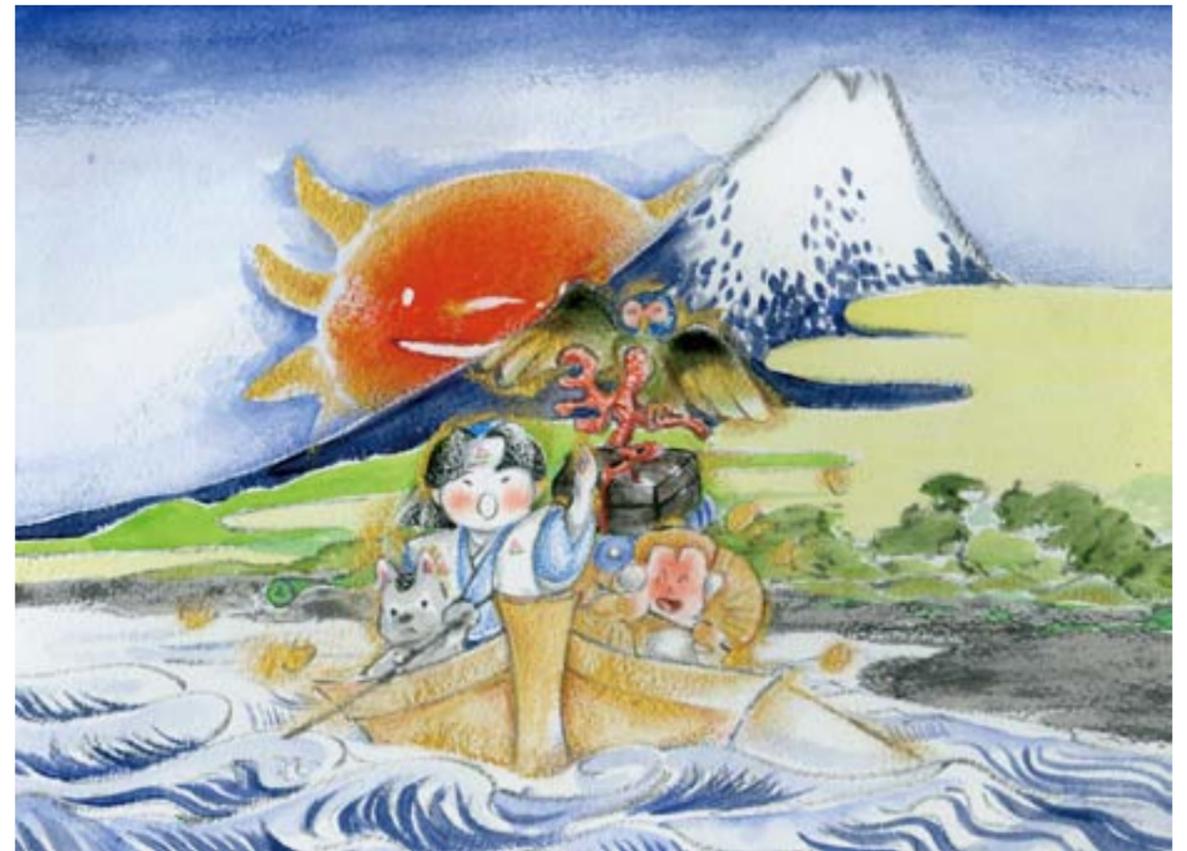
本展はもともと2020東京オリンピック・パラリンピック協力事業として、空港名でもおなじみの「桃太郎」をテーマに、現代美術家の新作と当館収蔵の関連作品を併せて紹介し、海外や遠方からのお客様にも「岡山の美術」の魅力を発信するための企画でした。ところが新型コロナウイルスの感染拡大により、オリンピックは来年に、同時開催を予定していた特別展も当面延期となりました。本展は予定通り開会したものの、前号の展覧会スケジュールに掲載した「若獅子会」の記念演奏会を中止し、緊急事態宣言の対象が全国に拡大されたことを受けて4月25日から5月6日まで臨時休館するなど、大きな影響を受けています。ただ、どんなに厳しい状況でも作品の魅力が変わりはありません。改めて展示の主題となる映像作品《令和おとぎ草子 桃太郎 KAMISHI by 松井えり菜》について詳しくご紹介しましょう。本作は、(公財)日本文化藝術財団が主催する「創造する伝統 杜の中の文化祭 2019 Cross the Arts and Culture」(会場:明治神宮参集殿)での若獅子会の演奏と、松井えり菜の紙芝居映像の共演が出发点となっています。2018年秋に長男を出産し、育児に追われる松井のもとに、財団から紙芝居「桃太郎」の制作依頼がありました。故郷岡山ゆかりの物語との出会いに運命を感じた彼女は、忙しい子育ての合間を縫って寝る間も惜しんで描き進め、20点余りの原画と紙芝居式に画像が入れ替わる映像作品を完成させます。美術の楽しさを子どもたちにも伝えたい、現代作品に親しむための扉を開きたいとの思いが、日々の制作の支えとなりました。愛らしい桃太郎の姿に、生まれたばかりの息子さんのしぐさや表情が重なります。柔らかい筆致の墨線や、滲みや掠れを活かしたアクリル絵具とパステルの色彩が、画面にほのぼのとした趣きを加え、物語を引き立てます。日本の伝統音楽の演奏との調和に配慮し、浮世絵や絵行燈の図案からもヒントを得ました。このたび会場では、2019年の演奏音源に、新たに描き足した原画を加え、動きのある映像に再構成した最新版(編集協力:



「令和おとぎ草子 桃太郎 KAMISHI by 松井えり菜」会場風景



(右)《あなただけDreaming!》2018年 本館蔵  
(左)《Welcome to the world of “うぶ毛プラネット”》2020年 作家蔵



《紙芝居「桃太郎」原画》より 2020年 作家蔵

川上秀行氏)を上映しています。本作は、音楽や映像など新たな表現手法による試みとしてだけでなく、社会とのつながりや美術の意味を見つめ直す契機になったと松井は語ります。また、一貫して取り組んでいる自画像の出産直前の代表作《あなただけDreaming!》と、長男の誕生を祝福する《Welcome to the world of “うぶ毛プラネット”》の油彩画による母子共演も、本展の見どころのひとつです。

さらに会場で注目を集めたのが、疫病を予言し封じる力を持つと話題の妖怪「アマビエ」のインスタレーションです。虹色のウロコ文様のドレスを身にまとい、レトロな籐製のベビーカー(乳母車)を押すその顔は…なんと桃色のウーパールーパーです。大きなクチバシと長い白髪で見事に変装しています。世相や流行を敏感に察知し作品に取り入れるセンスは、彼女の持ち味と言えるでしょう。加えて、9年前の震災時の危機感や身近な人との別離などの経験から、自らに「今できること」を常に考え、行動に移すよう心がけていると言います。本展会期中も、団体での来場が難しくなった保育園を訪ね、展示室で動画撮影を担当する先生との連携によるリモート鑑賞会を実施したり、大規模な公演の自粛が続く若獅子会の方々と協力して新作「浦島太郎」の制作を進めるなど、休むことなく活動を続けています。

さて「新しい生活様式」を取り入れながら、各地で美術館・博物館の活動が再開されています。当館でも、消毒や飛沫防止、適切な間隔の確保等の安全対策を整え、お客様をお迎えています。美術や身近な存在への作者の思いが伝わる空間で、心和むひとときをお過ごしいただければ幸いです。(本展会場に限り、展示室内での撮影も可能です。)また、来場が困難な方には、当館公式サイト「#おうちでミュージアム」(<https://okayama-kenbi.info/topi-homemuseum/>)にて、《令和おとぎ草子 桃太郎 KAMISHI by 松井えり菜》の映像をご覧ください。それぞれの状況に応じた方法で、遊び心あふれるおとぎ草子の世界をお楽しみください。

【岡山の美術 特別展示】「令和おとぎ草子 桃太郎 KAMISHI by 松井えり菜」(2020年4月10日—7月12日 ※会期延長)

# 特別展「坂田一男 捲土重来」を振り返って

橋村 直樹(学芸員)

昨年の12月から今年の3月にかけて、日本の抽象絵画の先駆者として知られる坂田一男(1889-1956)の画業の全貌に迫る特別展「坂田一男 捲土重来」が東京ステーションギャラリー(2019年12月7日~2020年1月26日)と岡山県立美術館(2020年2月18日~3月22日)で開催された。かねてより坂田一男を高く評価し注目してきた美術批評家で造形作家の岡崎乾二郎氏を監修者として迎え、同ギャラリーとともに約4年の年月をかけて準備してきた本展は、油彩画や水彩画、デッサンなどの主要な坂田作品に加え、フェルナン・レジェやル・コルビュジエといった坂田とほぼ同時代の国内外の作家の作品15点を交えた総数300点を超える作品群を展覧する大規模な回顧展となった。

これまで坂田一男というと、1920年代のパリにおいてキュビズム以降の抽象絵画の流れを本格的に学んだことから、当館所蔵の《キュビズム的人物像》のようなフランス留学時代の作品を代表作とみなすことが多かった。しかし、今回の展覧会の中で岡崎氏がとくにその重要性を強調したのは帰国後の作品群であった。とりわけ高潮によるアトリエの浸水の経験が坂田にとって決定的だったと考え、高潮被害により絵具が剥落している作品を展覧会のメインビジュアルとした(図1)。高潮被害を受けた作品が坂田の代表作として挙げられることはこれまでなく、斬新な視点であったといえるだろう。なぜなら、剥落が目立つ作品=壊れかけの状態の悪い作品と捉えられる可能性が高いからである。しかしながら、浸水被害のため所々剥落した作品は、坂田自身による修復・改変を経ることによって、絵具が落ちてカンヴァスがむき出しになっている箇所ですら見応えがあり、完全な作品として再生されている。さらに、水害の経験がその後の絵画制作に影響を与えていることは明らかで、高潮被害後の作品の中には浸水による汚れや剥落を模したようなマチエールが意図的に作られているものもあるのである(図2)。こうしてみると、やはりアトリエの浸水の経験が坂田の創作活動に与えた影響は大きく、今後は展覧会のメインビジュアルとして用いたような高潮被害の痕を残す作品が坂田の代表作のひとつとみなされるようになるのだろう。

ほかにも帰国後まもない時期の作品(図3)に見出されるボーリングのピンのような形状のモチーフを手榴弾とみなしたり、水平に伸びるスリット状の矩形が縦に積み重ねられた純粹抽象に近いように思われる作品を海の風景とみなしたりするなど、岡崎氏による坂田作品の解釈はいずれも新鮮で刺激的であった。それらの新たな解釈が妥当であるかどうかは現状では簡単には判断できず、今後の坂田研究によって明らかとなってくるだろう。

幸いなことに、東京会場で坂田展が始まったばかりの昨年の12月半ば、坂田一男の親族の方々から総数248件にもものぼる作品・資料の寄贈の申し出をいただいた。それらの新たに所蔵品となった作品・資料を有効に活用しながら、今回の新解釈の検証を含め、坂田作品の調査研究をさらに進めていくことが当館の使命だと強く感じている。今回の展覧会を経て、その重要性が再認識され、日本近現代美術史を語る上で欠かせない存在となったであろう坂田一男に関する研究は、新たな段階に入りつつあるのだ。



図1: 展覧会B2ポスター 《静物II》1934年 大原美術館蔵



図2: 《構成》1946年 個人蔵



図3: 《コンポジション》1936年 個人蔵

# 地下展示室のLED照明工事、完了！！

中村 麻里子(副管理者)

当館の展示室は昭和63年の開館以来31年間、岡田新一氏が設計した照明設備を基調に、平成25年度からLEDスポットライトを一部導入し使用してきた。しかし、早急にベース照明をLED化して、よりよい照明下で作品の展示を行いたい、というのは館員の総意であった。

そんな折、令和元年度の国の補正予算で地下展示室のLED化が認められることになった。早速先行例を調査するために茨城県近代美術館、水戸芸術館、和歌山県立近代美術館、熊本県立美術館へ視察に伺った。担当の方々にLED照明の導入について、機種選定からデモの実施、工事発注など事務的なことから技術的なことまで詳細にご教示いただいた。それらを参考にして当館での設備をどのように設計して進めていくかを、本庁の関係課(工事発注の文化振興課、技術協力の建築営繕課)や、(株)岡田新一設計事務所、指定管理の鹿島建物総合管理(株)、(株)YAMAGIWA、シーシーエス(株)、工事施工業者である地元の池田電業(株)と何度も会議を重ね話し合った。

まず、各400㎡程の大展示室「ア」「エ」(右下図)は、既存の照明設備のうち「光天井」と呼ばれる1辺6m余の大きな直接光のボックスを、そのまま生かすこととなった。中に直管LED40本を田の字型に配置している。また高さ7m余の天井に向けてのアップライトを上部に32本、また天井の既存のライティングダクトの外側に、新たに1辺40m口の字型にウォールウォッシャーとライティングダクトを増設した。光天井と増設ウォールウォッシャー、そしてアップライトで固定壁はほぼ均質な照明が得られる。可動壁の立て方によって臨機応変に対応しなければならないが、ダクトに取り付けたスポットライトによって、いかようにも対応できるようになっている。



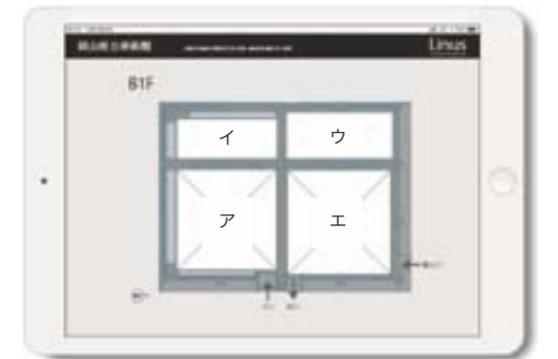
照明工事が終わった地下展示室「エ」の様子。上部に光天井が見える(画像提供: (株)YAMAGIWA)

また展示室「ア」には約12mと15mの2つの固定ケースがあり、ケース内の壁面をねらった上部、床面をねらった下部に各々8本1列の直管LEDが設置され、壁に掛ける掛軸等は前者、台に置く工芸品等は後者というふうに、それぞれの作品の特性にふさわしい照明を選ぶことができる。

各200㎡の小展示室「イ」と「ウ」は、まず既存の蛍光灯ボックス縦10個・横3個計26個をつなげた装置をそのまま生かし、30mの口の字型のウォールウォッシャーとして、上中下3列計78本の直管LEDが取り付けられた。天井高6m余の固定壁の照明は、全面を明るくしたりアイレベルに絞ったりでき、個々のon/off設定も可能。ライティングダクトも増設され、スポットライトの取り付け範囲が広がっている。また「イ」には約5mと15mの固定ケースがあり、「ア」の部屋と同様の仕組みで照明設備が設置されている。

工事は新型コロナウイルス感染拡大の影響で、一部海外で調達した部品の到着が遅れるなど不測の事態もあったが、関係者の努力のおかげで令和2年3月19日に検査を終え無事完成した。新しいLED照明システムは、照度・色温度が手元のタブレットで「ア」~「エ」の各展示室ごとに細かく設定できるなど、展示作品に応じた最適かつ最高の照明効果を上げるための機能も備わっている。

新型コロナウイルス感染拡大防止の影響で4月開催予定であった特別展が延期となったため、この照明設備はまだお披露目できていない。しかし地下展示室と同じ面積1200㎡の2階展示室については、従来の蛍光灯のままであり、さらには可動ケースについてもLED化には至っていない。今後早い時期に地下展示室の新しい照明システムとのギャップを埋めることが次なる悲願である。



タブレットの操作画面のイメージ

## 新収蔵品紹介

### File 16

吉田百太郎  
《伝馬遠「高士探梅図」模写》

八田 真理子(学芸員)



図1:  
吉田百太郎《伝馬遠「高士探梅図」模写》  
文化元(1804)年 本館蔵

当館のもつ中国絵画の一つに《高士探梅図》(図2)がある。梅花の下に人物が佇む月夜の情景が表され、小画面ながら詩趣に富む。制作年代は実際のところ元時代(14世紀)とみられるが、伝来のうへでは南宋時代(12-13世紀)の宮廷画家馬遠<sup>ばえん</sup>作とされ、さらに室町幕府第6代足利義教の所蔵品であったことから、日本で長らく珍重されてきた。江戸前期においては、狩野派中興の祖・狩野探幽(1602-74)がこの模写を残している(『臨画帖』個人蔵)。

昨年度、新出の模写が当館に寄贈された(図1)。本作では図様だけでなく梅花と積雪を示す白色や湖水としての淡青などの着色も丹念に写し控えられ、作者の真摯な学習意欲と安定した技量が窺える。墨線が全体に淡いことと後述する作者の出自を勘案すると、本作は探幽による模本を写した重模本と推測できよう<sup>\*1</sup>。下方の墨書からは吉田百太郎なる作者名と文化元(1804)年という制作年が判明する。

注目したいのは、この謎めいた作者についてである。吉田百太郎は、作品も来歴もほとんど知られていない人物だが、『古画備考』(嘉永3(1850)年起筆)巻42によれば、なんと狩野派出身の贋作者として多くの詐欺事件に関与したことが判明する。百太郎は鍛冶橋狩野家第7代の探信守道(1785-1836)門下出身でありながら、探幽や尚信(探幽弟)、久隅守景などの贋作を描き、高値で売っていたというのである。

同書はとりわけ次の事件を詳述している。文政5(1822)年のこと、奥絵師として幕府に重用されていた木挽町狩野家は、守景筆の三幅対について鑑定を依頼される。しかし以前にも木挽町は同様の三幅対を鑑定していたので、依頼された三幅対は偽物であると分かった。この贋作を制作したと明らかになった百太郎は取り調べを受けたが、「以前の三幅対(木挽町が本物だと信じたもの)も私が描いたものだ」と開き直る。木挽町が厳しく咎めても、「木挽町にもこのような鑑定間違いがあれば、その都度表向きにする」と恐れず言うので、さほど責められなかったという。

贋作者として百太郎が活動した期間は文政5(1822)~13(1830)年頃のような。新収蔵の本作はそれより20年ほど遡るもので、師の年齢を考慮しても、百太郎が10代から20代で鍛冶橋狩野家に学んでいた時期と推測できる。本作は、狩野派による中国絵画の模写とアーカイブ化という観点とともに、資料の不足から俎上に載せにくい贋作者の問題についても大いに示唆をもたらす貴重な作例といえるだろう。



図2: (伝)馬遠《高士探梅図》  
元時代(14世紀) 本館蔵

\*1: 静岡県立美術館の野田麻美氏のご助言と同氏による「模写と模倣のあいだにあるもの——狩野探幽『臨画帖』について」(『狩野派 画壇を制した眼と手』(『狩野派 画壇を制した眼と手』出光美術館、2020年)を参考とした。

## 展覧会スケジュール

7月  
July

4月10日|金|—7月12日|日|

【岡山の美術展】  
2020 東京オリンピック・パラリンピック協力事業  
令和おとぎ草子

桃太郎 KAMISHI by 松井えり菜

倉敷市出身の松井えり菜(1984-)は、大胆な構図と迫真の描写による自画像を中心に独自の絵画表現を展開しています。本展では、岡山ゆかりの「桃太郎」を描いた紙芝居原画、邦楽の若手囃子演奏家が集う「若獅子会」とのコラボレーションから生まれた映像作品、絵画や立体作品により、新たなおとぎ草子の世界をお楽しみいただけます。

8月  
August

8月1日|土|—9月8日|火|、  
9月21日|月|—9月27日|日|

【特別展】  
高畑勲展  
—日本のアニメーションに遺したもの—

「アルプスの少女ハイジ」(1974)や「火垂るの墓」(1988)、「平成狸合戦ぽんぽこ」(1994)や「かぐや姫の物語」(2013)といった誰もが知っている作品を生み出したアニメーション監督・高畑勲(1935-2018)。常に今日的なテーマを模索し、それにふさわしい新しい表現方法を徹底して追求した高畑は、戦後の日本のアニメーションを牽引し続けるとともに、国内外の制作者に大きな影響を与えました。本展では、絵を描かない高畑の演出術に注目し、制作ノートや絵コンテなどの多数の未公開資料も紹介しながら、その革新性や創造の秘密に迫ります。

9月  
September

9月9日|水|—9月20日|日|

第71回 岡山県美術展覧会

9月26日|土|—11月3日|火・祝|

【岡山の美術展】 赤松麟作

赤松麟作(1878-1953)は津江市に生まれました。83年に大阪へ転居します。東京美術学校西洋画科を卒業したのち、1901年の第6回白馬会展に、《夜汽車》(東京藝術大学蔵)を出品して高い評価を得ました。04年には帰阪して同地の画壇で終生活躍します。風俗や物語の絵画、風景画、また花と鳥を描いた絵画、そして裸婦など、当館所蔵品を生かしつつ、国内にある代表作を取り上げる、17年ぶりの回顧展です。

国・県の方針により会期等を変更する場合がございます。最新情報は岡山県立美術館ホームページもしくは、各SNS公式アカウントにてご確認ください。

ホームページ  
<https://okayama-kenbi.info>



Facebook(@okayama.kenbi)  
<https://www.fb.com/okayama.kenbi>



Instagram(@okayama\_kenbi)  
[https://www.instagram.com/okayama\\_kenbi](https://www.instagram.com/okayama_kenbi)



Twitter(@okayama\_kenbi)  
[https://twitter.com/okayama\\_kenbi](https://twitter.com/okayama_kenbi)



各回16:00~16:30

コンサート 「Drawing Melodies  
~響き合う表現~」

会場 2階展示室など ※要観覧券

・8月7日|金|

演奏 上月真子氏(オーボエ)、  
岡山城東高等学校 管弦楽部

・8月14日|金|

演奏 次松大助氏(ピアノ)

・8月21日|金|

演奏 西室伸也氏(サクソフォン)、都カルテット

8月28日|金| 18:00~18:30

音楽の夕べ 「Drawing Melodies  
~響き合う表現~」

会場 2階展示室 ※要観覧券

演奏 トウヤマタケオ氏(ピアノ)、  
当真伊都子氏(ピアノ、ボーカル)

### 牡丹と芍薬

守安 収

新型コロナの影響により、GW期間の休館と特別展の延期や中止を余儀なくされました。安全対策を十分にとり、5月7日からは常設展を再開しましたが、ワークショップやギャラリートークなどは休止中。本来の来館者数を求めるのは困難な状況なれど、さまざまな想いを抱いて訪れる方々に「岡山の美術」を楽しんでいただけたら幸いです。ともあれ、いつもの県美へ復する努力を怠るわけにはいきません。▼しばらく前まで自宅の庭は、牡丹が4本、芍薬が3本、牡丹と芍薬が同じ根から生えているのが1本、花盛りでした。でも何か変。1年に1本ずつ島根県大根島産の牡丹を植えたのですから。お察しの通り、接ぎ木に花を咲かせているので、何年かで半数は本家帰りして芍薬に戻ってしまったという次第。富貴のシンボルとされる艶やかな牡丹は、貧しいわが家に向かないということではないようです。牡丹にも芍薬にも罪はありません。放置していた私が悪いのです。眼を向けず手も入れずお金もかけないと、元の本阿弥になるという教訓であり、詰まるところ、根が肝心ということでもあります。それは美術の世界でも同じでしょう。▼只今、2F常設展示室の一室400㎡の空間では、「令和おとぎ草子 桃太郎KAMISHI by 松井えり菜」を開催中(7月12日まで延長)。松井さんは岡山県新進美術家育成「I氏賞」大賞受賞者。彼女の紙芝居「桃太郎」の原画を展示し、それにお囃子をつけて動画にした映像を上映、桃に見立てた巨大風船を膨らませるなど、松井ワールド全開です。当館は、岡山県ゆかりの作家がしっかりと根を張って伸びていくためのお手伝いができたらと考えています。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48  
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648  
Email [kenbi@pref.okayama.lg.jp](mailto:kenbi@pref.okayama.lg.jp)  
<https://okayama-kenbi.info>

交通案内 JR岡山駅後楽園口(東口)から  
・徒歩約15分  
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩約3分  
・宇野バス 岡山後楽園バス「岡山県立美術館」下車すぐ  
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ  
開館時間 9:00—17:00 (入館は16:30まで)  
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)  
休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

### 編集後記

三井麻央

新型コロナウイルスの感染拡大により、当館もいつもとは違った、少し穏やかでない春の季節を過ごしました。それでも少しずつ、全国各地の美術館が再開へむけ動き出している現在、当館でも消毒液や受付への飛沫防止用アクリル板の設置、会場内での適切な距離の確保を図るなど、感染防止に向けた対策に取り組んでいます。また公式ウェブサイトでは、自宅で美術を楽しめるさまざまなコンテンツをまとめたページ「おうちでミュージアム」を公開しています。開館に関する最新情報とともに、こちららぜひチェックしてみてください。